

Nami Nakanishi
中西 奈美

日経BP
デジタルコンテンツ局
デジタル編集部

千葉県出身 | 2003年3月 お茶の水女子大学理学部化学科卒業
2003年4月 日経BP 入社



仕事と家庭との両立。

私なりの最適解を考えています。

R1 お茶大での学生生活は、現在の仕事にどう生きていますか。

理系学部のカリキュラムは、実験(実習)やレポート作成で拘束時間が長くなりがちですが、その合間を縫って、さまざまなアルバイトをしたり、講演会に参加したりしていました。資格試験の勉強にも取り組みました。

そんな大学時代に、実験やレポートをまとめる「アウトプット」と、講演会への参加などの「インプット」のどちらも楽しめる特性が培われたと感じています。アウトプットの過程は、もやもやとしたツライ時間なのですが……、終わってみると「次は何をしようかな」と考えてしまいます。

今の仕事ともリンクしますが、自分のアウトプット、特に「考えをまとめ伝えること」「表現を工夫すること」に心から満足したことはなく、きつと終わりはしないでしょう。だからこそ、自分はまだ成長できる=楽しいと思えるのかもしれない。

R2 現在のお仕事に就くまでの経緯を教えてください。

4年生になる2002年春に就職活動をして、本命の日経BPに入社しました。就活中はそれまでの自分の活動や特性について棚卸し、「働くこと」について考えるいい機会でした。

志望企業を決める上で、譲れなかった条件は「文系・理系関係なく活躍できる職種、男女ともに続けられる仕事」。多くの人に会い、学び続けられるマスコミはとても魅力的でした。中でも、取材内容をじっくりと分析し、深掘りした記事を提供する専門誌に憧れ、雑誌記者になりたいと、出版社にばかりエントリーしました。

日経BPは、エンターテインメントやライフスタイルに関する月刊誌のほか、コンピュータから医療に至る幅広い分野の専門誌を出しています。同じ社内異なる専門知識を持った記者が多くいることも、刺激的でワクワクする職場です。

入社後は、『日経メディカル』という医師向けの雑誌に配属されました。チューターの先輩に、社会人としての立ち居振る舞いや、記者としてのノウハウを教わりながら、取材・執筆でトライ・アンド・エラーを繰り返しました。

入社から17年の間に、ニューズレター『日経バイオテク』、薬剤師向け月刊誌『日経ドラッグインフォメーション』、一般向け健康サイト『日経Gooday(グッデイ)』、女性健康誌『日経ヘルス』などの編集部を転々となりました。記者や編集者に加え、新規媒体の立ち上げなどにも関わってきました。2019年の春から、SNSを活用してコンテンツを売り込む「デジタル編集部」に所属しています。

R3 現在のお仕事内容を教えてください。

デジタル編集部は、現場で身につけた記者の土地勘と、雑誌編集で培われたコンテンツ力を生かして、記事をおすすめしています。書店のPOP(ポップ)をSNS上で展開すること、と私はよく例えています。

スマートフォンが普及し、いつでもどこでもネット上の情報にアクセスすることが可能になりました。一方でどの情報にアクセスしたらいいか、情報の波にもまれて遭難してしまう人も少なくありません。必要な人に必要な情報を届けるために、SNS上の少ない文字数にいつも“おせっかい”を込めています。いいね!やシェア(リツイート)などのアクションが起こると、誰かの役に立ったのかもしれないと、ちょっとだけ嬉しくなります。

記者を志望して入社したので、記事を書く現場から離れても寂しくない……といえば、ウソになります。ただ今は私にとって仕事と家庭の両立が非常に大切な局面を迎えており、現場で長時間働くのが難しくなっていました。というのも、8歳になる長男は自閉傾向があり、公立小学校の特別支援学級に通っています。彼なりの特性を理解し、成長を促す環境を提供する

ために、母親としての情報収集や学びは欠かせません。彼もまた、ダイバーシティという新しい世界を教えてくれる大切な存在です。

その延長線上で、地域の活動にも積極的に参加しています。障がいのある子どもだからといって閉じ込めておかず、外との接点を持たせたいとの考えがベースにあるからです。長男本人への刺激もありますが、周りの人々からも病気を理解してもらえているように感じています。昨年度は子供会の会長を務め、多くのお母さん・お父さんとの交流がありました。自分の近いところから、世の中が少しずつ変わっていかばいいな、と思っています。

R4 在学生へのアドバイス・メッセージをお願いします。

私が在籍していた理学部化学科は、大学院へ進学する人、化学の知識を生かした専門職に就く人が多いので、マスコミを志望した自分は“はみ出し者”だったかもしれません。でも、これまでに一度も、マスコミを選んだことを後悔していません。

大学時代は、人生最後の「何にも染まらない自分」でいられる時間かもしれません。歳を取るほど、世間からも周りからも求められるものが多くなります。なので、時間を見つけていろんな世界を見てほしいと思います。

オトナになった先輩たちはずるくて、いかにも簡単に成功したような話をするがありますが、初めからうまくできる人なんてほとんどいません。失敗したっていいんです。挫折も失敗も、将来の笑い話にしてやりましょう!

文責：基幹研究院自然科学系教授 森 義仁

わたしのオフタイム

夏から家族に加わった、愛犬「ふうちゃん」と遊ぶ時間は私の癒しです。遊びたい盛りの子犬相手に、私も無心になって遊びます。